

## ティブッルスとプロペルティウス ティブッルス第1巻第8歌におけるプロペルティウスへの言及

日向太郎

### (1) ティブッルスの叙述手法

ティブッルス（紀元前55年頃～同19年）の恋愛詩集第1巻第8歌（以降Tib. 1.8のように記す）の冒頭において、「私」は他ならぬ実体験によって、自身が恋の辛さを味わい、恋愛の機微を熟知するようになったことを告白する。「私」は恋愛事の先達であることを自覚し、いくぶんからかうような調子で何者かに語りかけている。「君」は自分の恋心を隠しているが、そのことは「私」にはすっかり明瞭なのだ。だが、その相手が誰なのかは、徐々にしか明かされない。「君」といわれる人は、お洒落や身づくろいに余念がない。「私」はこうした「君」の外観への気遣いに恋着を読み取っているのである。通常そのような営みは女性のたしなみであるから、女に呼びかけているのかしらと読者は想像する。

ところが、illa placet (15) と漠然とした形で「君」と対比的に言及されている人物も女である<sup>1</sup>。彼女は女性であっても、お洒落には関心がないようである。そして、「君」は、何の飾りも必要としない程の美貌の持ち主である彼女に熱烈に恋をしている。そしてかなり遠回しながらも、「君」と呼びかけられていた人物が男性であることが明かされるのは、ようやく *Quid queror, heu, misero carmen nocuisse* と *miser* の男性単数与格形が用いられる23行目に達してからである<sup>2</sup>。

続いて今度は、美貌の「彼女」に「私」は呼びかける。熱愛してくる男をじらし続ける女性は、金持ちの老人と関係を持っており、老人のために彼女は（恐らく）財力に乏しい若い男（「私」は彼を「少年 *puer*」と呼んでいる）を蔑ろにするようである。「私」は、そのような金品目当ての付き合いを諫め、若い男性との恋を謳歌するように諭す。誰にも相手にされなくなった老後には、過ぎ去った青春を惜しむことになる。かつての美貌は失われ、化粧や身づくろいによって男の目を欺くより他はなくなると言って警告する。さらに、この段階で、ようやく件の若い男は、マラトゥスという人物（*neu Marathum torque* [49]）であることが判明する。

「私」は、マラトゥスにつれない態度を取らないよう懇願した後、今度は哀れな少年の嘆きの言葉を引用する。それから少年に泣くことを禁じる一方、少年に思いを遂げることを許さない乙女の傲慢な態度を、神罰が下されることをちらつかせながら、再度戒める。そして、ようやく詩の終結間際になって、彼女の名前がポロエー *Pholoe* (*oderunt, Pholoe, moneo, fastidia divi* [69]) で

<sup>1</sup> R. Maltby, *Tibullus: Elegies. Text, introduction and commentary*, Cambridge 2002, 301; ad 1.8.15 (304).

<sup>2</sup> Maltby, 301; ad 1.8.23 (308).

あることが判明する。

このように Tib. 1.8 は、全面的に「私」の叙述によって構成されている。読者は徐々に付け加えられてゆく情報を積み重ね、推量する。ときにその推量は裏切られ、思い描く世界の修正を迫られる。詩が終わるときに、ようやく「私」を取り巻く恋愛の全容が明らかになる仕組みになっているのである。

さらに付け加えるならば、この歌のみならず、同じティブッルス詩集第1巻の第4歌を読んだ読者は、そこにもマラトゥスという名の美少年が言及されていたことを思い出すだろう。Tib. 1.4 において、「私」は恋の御利益をもたらしてくれると信じられているプリアープス神の像に、恋愛の極意を授けるように求める。すると、神は「私」が美少年の歓心を買うための手練手管を指南する。こうして、「私」は将来自身が若者のあいだで恋愛の教祖的存在として尊敬されることを思い描いている。その一方で、意中のマラトゥスに魅了されながらも、彼を靡かせることができなことを嘆きつつ歌を締めくくる。無論同じ名前だからといって同じ人物であるとは限らないが、少なくとも読者は Tib. 1.8 が、Tib. 1.4 の続編である可能性を想定することになる。

ティブッルスは、たとえば第1巻第8歌と同じく全78行のエレゲイア詩、第1歌でも同じような叙述の手法を取っている。黄金を積み重ね広い耕地を所有する一方、常に近接する敵と戦い安眠を軍隊の喇叭に妨げられる他者 *alius* に対して、農夫である「私」は田舎において自給自足の生活を送る。そのような自身のつつましくも敬虔なる暮らしを描き進め、田園世界のささやかな喜びを歌い上げている (43-48)。

「小さな収穫で十分だ。もし可能ならば寝台で休み、いつもの床で体の疲れを取ることで十分だ。何と愉快なことだろう、容赦ない風の音を寝たままで聞くことは、そして、恋人を (dominam) 柔らかな懐のなかで抱きかかえることは。あるいは、冬の南風が冷たい雨を降り注ぐとき、火の暖かさに恵まれて憂いなく眠り続けることができることは。」

恋人の存在は、ようやく 46 行目に、しかも唐突に言及されている。この後、航海によって富を求め蓄財に精を出す人と自身との隔たりを歌う。付随して、海と陸において軍事的功績を収める詩人のパトロン、メッサツラに呼びかけ、怠惰な自身との対比を際立てる。そして詩人の意識は、恋人に向かい、彼女に呼びかける。

「私は美しき乙女の縄目に縛られたままでおり、門番となって堅い扉の前に腰かける。私は褒められることを気にかけず、我がデーリアよ、私は君と一緒にいられる限り、どうか、ぐず、役立たずと呼ばれたいものだ。」

読者はここで、初めて「私」の意中の人<sup>1</sup>がデーリアであることを知らされる。以降、「私」は彼女と添い遂げることを願い、彼女が自らの死を看取ってくれることを夢見て、これを愛の理想として描く。束の間の青春だからこそ、今恋のよるこびを堪能することを促す。こうして、Tib. 1.1 の眼目は、田園生活の称賛ではなく、実は愛する人との共同生活の価値を説得的に歌い上げることにあったことが判明する。田園は、所詮共同生活の背景に過ぎなかった。Tib. 1.1 でも、Tib. 1.8 と同様に、ティブッルスは歌の核心にはなかなか入らず、歌の全体像はなかなか明らかにならない。

## (2) ティブッルス第1巻とプロペルティウス第1巻

それにしても、ティブッルスは何故このように読者をじらしたり、また欺くような叙述手法を取るのだろうか。その意図は何なのか。プロペルティウスがその詩集の第1巻第1歌（以降 Prop. 1.1 のように記す）を恋人キュンティアの名前によって歌い出す（*Cynthia prima suis miserum me cepit ocellis*）のに対し、ティブッルスは Tib. 1.1 でデーリアとの恋になかなか言及しない。Lyne は、この両者の対照性に注目している<sup>3</sup>。他方で、Maltby は、Tib. 1.8 が言葉遣いや主題について Prop. 1.9 と多くの類似点をもっていることに注意を促している<sup>4</sup>。ティブッルスの、とりわけ Tib. 1.8 の叙述の特徴について考察するためには、同時代の恋愛詩人プロペルティウスとの比較が必要となるように思われる。

### 2.1 Tib. 1 と Prop. 1 の成立年代

まず、基本となるのは両者の作品の成立年代である。その推定にあたって、Lyne はそれぞれの詩集に含まれている同時代の出来事への言及に着目している<sup>5</sup>。プロペルティウス詩集第1巻においては紀元前29年以降に行われたと思しき執政官ルーキウス・ウォルカーキウス・トゥッルスの甥の東方旅行について言及がある（Prop. 1.6）。他方、プロペルティウスの後続の第2巻には紀元前28年の結婚法案廃止の言及（Prop. 2.7）が含まれている。また Tib. 1.7 は、紀元前27年9月におけるメッサッラ・コルウィーヌスの凱旋を讃えている。このことから、Prop. 1 は紀元前28年、Tib. 1 は紀元前27年には出版されたと考えられる。

Lyne の推定は、至極妥当に思われる。だとすれば、ティブッルスが Prop. 1 を視野に入れながら、Tib. 1 を制作する可能性があったことになる。とはいえ、巻に含まれている個別の歌が、朗読会のような機会で披露された可能性も捨て切れない。その場合は、個別の歌が、詩集の出版に先立って人々の知るところにもなっただろう。ただし、Tib. 1.8 にかんして言えば、以降の考察が示唆するように、プロペルティウス第1巻の出版よりも後に成立したと思われる。

### 2.2 Tib. 1.8 と Prop. 1.9

Tib. 1.8 で「私」は恋愛の師として、若者らに恋愛の心得を指南する。彼は、いわゆる *magister amoris* もしくは *praeceptor amoris* である。このような役割の自覚は、Tib. 1.4 でも表明されている。彼と同時代の詩人、プロペルティウスの第1巻にも「私」が *magister amoris* として、叙事詩人ポンティクスに呼びかける第9歌がある。この Prop. 1.9 で「私」は、恋に落ちた友人に得意になって「私は言っていただろう、私を嘲笑した人よ、君にも恋がやって来ると」と切り出す。Tib. 1.8 同様、やはり揶揄が歌全体の基調をなす。この「君」が誰であるかは、全34行の歌の後半部26行目でようやくポンティクス Ponticus なる人物であることが判明する。同じ名前の友人は、Prop. 1.7 にも出てくる。Prop. 1.7 においてポンティクスは、プロペルティウスの恋愛詩を蔑

<sup>3</sup> R. O. A. M. Lyne, 'Propertius and Tibullus: Early Exchanges', *Classical Quarterly* 48 (1998), 519-44, 524.

<sup>4</sup> Maltby, 302. Cf. P. Murgatroyd, *Tibullus I*, University of Natal Press 1980, 233. Murgatroyd はティブッルスがプロペルティウスに影響を受けていると考えている。

<sup>5</sup> Lyne, 520-523.

ろにし、ホメーロスに張り合おうとする叙事詩人として呼びかけられている。叙事詩の創作に余念がなく、悲惨な戦争の主題ばかり扱っていたポンティクスは、Prop. 1.9において奴隷女に心を奪われたと言われている。恋において彼と彼女の主従関係は逆転し、彼は奴隷に彼女は主人 (domina) となった。最早、叙事詩を作ることはままならない。だからこそ、自らの恋愛体験を告白するように、体験を素材にして「私」同様恋愛詩の創作に没頭するように、呼びかけている。

Prop. 1.9はTib. 1.8とは少し異なり、呼びかける相手に文芸上の転向を奨める趣旨となっている。とはいえ、恋の先達として友人の恋心の機微を読み取り、おとなしく愛神に従うことを促す点では、やはりTib. 1.8と共通する。Tib. 1.8が同一人物とおぼしきマラトゥスの登場によってTib. 1.4と結合しているように、Prop. 1.9もやはりProp. 1.7の続編として機能しているように見受けられる。以下Tib. 1.8とProp. 1.9との接点を詩行のレベルで比較し、その照応関係を検証したい。

さて、2つの歌の緊切なつながりを最も端的に示していると思われるのは、以下のcoupletである<sup>6</sup>。

quid tibi nunc molles prodest coluisse capillos

saepaque mutatas disposuisse comas,

(Tib. 1.8.9-10)

柔らかな髪を手入れすることが、髪型を変えて整えることが、今や君に何の役に立つか。

quid tibi nunc misero prodest grave dicere carmen

aut Amphioniae moenia flere lyrae?

(Prop. 1.9.9-10)

厳めしい歌を歌い、アンピーオーンの豎琴が作った城壁 (= テーバイの城壁) を嘆くことが、今や哀れな君に何の役に立つか。

前者は、髪を整えて意中の乙女に気に入られようとする若者の空しい試みをからかい、後者は恋に落ちた詩人が叙事詩的題材にこだわり続けることの無意味を説いている。下線部の「今や…君に何の役に立つのか」を意味する部分は、ぴたりと合致しており、一方が他方を模倣している可能性が高い。

Tib. 1.8.1-6において、恋の機微を見抜く「私」の能力は、くじ占い、犠牲獣の内臓、鳥占いといった予言の術に頼るものではなく、愛の女神ウェヌスの調教に伴う恋愛経験の賜物であることが表明されている。

Non ego celari possum, quid nutus amantis

quidve ferant miti lenia verba sono.

nec mihi sunt sortes nec conscia fibra deorum,

praecinit eventus nec mihi cantus avis:

<sup>6</sup> W. Wimmel, *Der frühe Tibull*, München 1968, 59; Murgatroyd, ad loc; Maltby, ad loc.

ipsa Venus magico religatum brachia nodo  
perdocuit multis non sine verberibus.

(Tib. 1.8.1-6)

恋する者の顔つきが何を、あるいは穏やかな声音に込められたやさしき言葉が何を意味するかということ、私に隠すことはできないよ。私は、籤も神々を知る〔犠牲獣の〕腸も持たず、鳥の歌声は私にできごとを予言しない。ウェヌス御自身が魔法の結び目で腕を縛った者（＝私）を教育した。でも、それには多くの鞭打ちを伴うのだった。

字面の類似はないけれど、この詩行の内容が Prop. 1.9 の以下のような一節のそれと対応していることは、確かだろう。

non me Chaoniae vincant in amore columbae  
dicere, quos iuvenes quaeque puella domet.  
me dolor et lacrimae merito fecere peritum:

atque utinam posito dicar amore rudis!

(Prop. 1.9.5-8)

カーオニアの鳩たちも、恋にかんして、どの若者をどの乙女が征服するかを歌うことにかけては、私を凌ぐことはないだろう。苦痛と涙によって、私は恋の達人になるべくしてなった。でも、恋など捨てて、初心な男と呼ばれたいものだ。

「カーオニアの鳩たち」とは、ゼウスの神域として有名なドーローナの森に憩い、予言の能力を発揮するとされている神聖な鳥である。それは、ティブッルスの上記一節における「鳥の声」に相当するだろう。ところが「私」は、恋愛の事情を悟ることにかけては、こうした霊験あたたかな存在すら上回る。それは、「私」が恋の苦しみを嫌という程味わった代償なのである。

また Tib. 1.8.7-8 で「私」は、自身が恋をしていることを潔く認めようとしないう者に対する愛神の仮借なさにも触れている。

Desine dissimulare: deus crudelius urit,  
quos videt invitos succubuisse sibi.

(Tib. 1.8.7-8)

誤魔化すことは止めよ。神は、嫌々自分に平伏するのを目の当たりにする者らを一層過酷に燃え立たせる。

これは裏を返せば、自身の恋を認めることで愛神の態度を軟化させ得ることを意味するのであるから、Prop. 1.9 の最終 couplet に通ずるだろう。

quare, si pudor est, quam primum errata fatere:  
dicere quo pereas saepe in amore levat.

(Prop. 1.9.33-34)

だから、恥ずかしければ、できるだけ早く迷いを告白せよ。恋においては、何故君が身を滅ぼすかを語ることで、救われるから。

プロペルティウスは、すでにこの歌のなかで愛神の弓矢が及ぼす傷に比べれば、「アルメニアの虎に近づいたり、イクシーオーンの輪に縛り付けられたりする方がまし」だとまで言っているが (Prop. 1.9.19-22)、それ程の神の猛威からも、恋心を打ち明けることで（とくに Prop. 1.9 では恋愛体験を詩にすることで）救われるのである。

### (3) Tib. 1.8 と Prop. 1 との響き合い

続いて、Tib. 1.8 との比較対象の範囲を、Prop. 1.9 に限定せずプロペルティウス第1巻全体にまで拡張してみる。そもそも Tib. 1.8 の incipit である *Non ego celari possum* の最初の2語は、プロペルティウス第1巻に含まれる2つの歌の incipit と一致している (1.6.1: *Non ego nunc Hadriae vereor mare*; 1.19.1: *Non ego nunc tristis vereor*)<sup>7</sup>。以下、Tib. 1.8 の各節ごとにその叙述の特徴を省察し、プロペルティウス作品との対応関係を指摘する。

#### 3.1 魔術への言及

Tib. 1.8.17-26 では、何が一体若者の熱情をかき立てているかを述べているが、その歌い方は、直截的ではない。

Num te carminibus, num te pallentibus herbis

devovit tacito tempore noctis anus?

cantus vicinis fruges traducit ab agris,

cantus et iratae detinet anguis iter,

cantus et e curru Lunam deducere temptat

et faceret, si non aera repulsa sonent.

Quid queror, heu, misero carmen nocuisse, quid herbas?

Forma nihil magicis utitur auxiliis:

Sed corpus tetigisse nocet, sed longa dedisse

oscula, sed femori conseruisse femur.

(Tib. 1.8.17-26)

老婆が、静かな夜の時間に、君を呪文によって、君を青白い薬草によって呪縛したというのだろうか。呪文は隣の畑から穂を移し、呪文は苛立つ蛇が進むのを阻み、呪文は月が車駕から降りるように誘いかけ、叩かれた銅鑼が鳴らなければ<sup>8</sup>、誘い出すことができよう。嗚呼、何故私は呪文が哀れなる者を害することを、薬草が害することを嘆くか。美貌は何ら魔術の助けを要さないもの。だが体に触れたり、長い接吻を与えたり、腿に腿を密着させたことが害となる。

<sup>7</sup> Maltby, ad 1.8.1

<sup>8</sup> 銅製の楽器を叩くことが、月を誘い出す妖術や（悪魔の仕業と考えられていた）月蝕を防ぐために効果があると考えられていた。Cfr. K.F. Smyth, *The Elegies of Albius Tibullus*, New York, Cincinnati, Chicago 1913, ad loc; Murgatroyd, ad loc; Maltby, ad loc.

全体として「XではなくYである」という言い方になっており、Xに相当するのが呪文や薬草といった魔術であり（17-22）、Yに相当するのが長い接吻や肉体の接触（とくに腿の触れ合い）といった挑発行為である（25-26）<sup>9</sup>。逆接の接続詞 *sed* は三度繰り返されて、悩ましい行為が具体的に個別的に数え上げられる。しかし、全体の表現は均衡を欠いていて、YよりもXの方が異様に長い。ティブッルスはわざと核心となるYよりも否定されるXの方に重きを置いている。脱線と言ってもよいだろう。*cantus*の語を三度繰り返すのは、Maltbyの指摘するように<sup>10</sup>、呪文の言語を模倣しているからかも知れない。この一節に限ってみても、話の核心からわざと外れる、じらしの話法というべきものが機能しているように思われる。「私」自身、「嗚呼、何故私は呪文が哀れなる者を害することを、薬草が害することを嘆くか」と言い、自分自身のじらしの話法に対してすらしびれを切らしてみせる。

鮮やかな印象をもって描出される魔術の世界は、プロペルティウスの以下のような一節を連想させる。

at vos, deductae quibus est fallacia lunae  
 et labor in magicis sacra piare focus,  
 en agedum dominae mentem convertite nostrae,  
 et facite illa meo palleat ore magis!  
 tunc ego crediderim vobis et sidera et amnis  
 posse Cytinaeis ducere carminibus. (Prop. 1.1.19-24)

だが、月を導く欺瞞の術を持ち、魔法の竈で供物を捧げる仕事に携わる人たちよ、さあ、すぐに私の恋人の心を振り向けさせ、彼女（＝キュンティア）が私よりも血の気を失うことになるように。そのときは、私は君たちを信じることになるだろう、キュタイアの歌によって君たちが星や川を導く力があることを。

もし魔術が自然に働きかけ、意のままに動かすことができるのであれば、是非そのことをキュンティアについて実証してもらいたい。我が愛しのキュンティアが自分に夢中になるようにして欲しい。「私」は、魔術の使い手たちにそのように呼びかけている。「月を導く欺瞞の術」は Tib. 1.8.21-22 に対応するだろう。「キュタイアの歌」は「コルキスの歌」、すなわち「(魔術の心得のある)メーデイアの呪文」を意味するから、上記 Tib. 1.8.17-26 で奇跡を惹き起こすとされる呪文に相当することは明らかである。

### 3.2 富にまさる恋の喜び

Tib. 1.8.27 以降の一節は、*Nec tu difficilis puero tamen esse memento*（とはいえ、君は少年に対して気難しい者とならぬように心がけよ）と切り出され、今度はポロエーを相手に「私」が恋の教

<sup>9</sup> Cf. Murgatroyd, ad loc. *femori conseruisse femur* は、恐らくは男をじらして生殺しの状態に置くものであり、合体を意味すると思われる後述の *teneros conserit usque sinus* (Tib. 1.8.36) とは区別すべきだろう。

<sup>10</sup> Maltby, ad loc.

訓を垂れることになる。プロペルティウス第1巻において、女に対する説教は、キュンティアのおめかしを諷める Prop. 1.2、イッリュリアへの旅を思いとどませようとした Prop. 1.8、歡樂の地バーイアエから彼女を遠ざけようとした Prop. 1.11、彼女の不実を非難する Prop. 1.15 などにも認められる。他方、Tib. 1.8で「私」は、ポロエーに対してマラトゥスの情熱に真摯に応えるように、金品などの贈り物を（老人から貢がせて）彼からは求めぬように説いている。若さは黄金よりも貴いものであり、抱擁に際して滑らかなる頬や肩と触れ合う喜びは王国の富にも勝る。

carior est auro iuuenis, cui levia fulgent  
 ora nec amplexus aspera barba terit.  
 huic tu candentes umero subpone lacertos  
 et regum magnae despiciantur opes.

(Tib. 1.8.31-34)

すべすべの頬が光り輝き、抱き締めても伸びた髭がこすらないような若者は、黄金にも増して貴重である。この者にこそ、君はその肩の下に白く輝く腕を差し込み、王侯たちの偉大なる富は侮蔑せよ。

同様に、Prop. 1.14においても、「実際、彼女が私と憧れの休息を過ごすことにせよ、心安らかな恋で日がな一日をだらだら暮らすにせよ、そのときこそ、[砂金に満ちていることで名高い] パクトルス川の水が我が家の下にまで流れ込み、紅海に沈んでいる珠玉が採集される。そのときこそ私の喜びは、諸王が私に負けることを請け合う (Prop. 1.14.9-13)」と歌われ、愛の喜びは莫大な富に匹敵し、王国の富にも優るとされている。

### 3.3 ウェヌスの加護

続いて、Tib. 1.8ではウェヌスが恋する者には助けをもたらすことを歌っている。

At Venus invenit puero concumbere furtim,  
 dum timet et teneros conserit usque sinus,  
 et dare anhelanti pugnantis umida linguis  
 oscula et in collo figere dente notas.

(Tib. 1.8.35-38)

一方、ウェヌスは若者と秘かに臥所を共にすることを可能にする、彼が恐れながらも柔らかな懐を結び合わせるあいだに。また、抗う舌でもって喘ぐ者には濡れた接吻を与え、首には歯でもってしるしを付けることを可能にする。

注釈者たちの指摘するように、ポロエーが、老人の監視の厳しさを理由に、勧告に抵抗することを予測して、「私」は恋の営みにウェヌスの加護があることを述べているのだろう<sup>11</sup>。恋の喜びの大きさを歌った Tib. 1.8.31-34 とこの一節とのあいだには、やや論理的な飛躍が感じられるか

<sup>11</sup>Murgatroyd, ad loc; Maltby, ad loc; R. Perelli, *Commento a Tibullo: Elegie, Libro I*, Soveria Mannelli 2002, ad loc.



も知れない。しかし、3.2 で引用した Prop. 1.14.9-13 の後にも、ウェヌスの存在に言及があることは注目に値するだろう。「実際愛神が敵対するときに、誰が富に喜ぼうか。ウェヌスが怒っているとき、私は如何なる褒美も望まない。女神は英雄たちの偉大なる力を叩き潰すことができ、頑なな心にすら痛みとなり得る。女神はアラビア人の敷居をまたぐことも、紫で染めた寝台に忍び込むことも恐れなかった。トゥッルスよ、哀れな若者を寝床の上で寝返り打たせることも恐れなかった」(Prop. 1.14.15-20) このプロペルティウスの一節においても、ウェヌスの偉大な力が畏怖の対象となり、称賛されている。「アラビア人の敷居」や「紫で染めた長椅子」は金持ちの住まいの象徴である。さらに、プロペルティウスはウェヌスの偉大さをこのように述べてから、「様々な糸で編んだ絹織物が、何を癒してくれようか *quid relevant variis serica textilibus?* (Prop. 1.14.22)」と恋のない人生における贅沢品の無意味を指摘する。この叙述の運びは、Tib. 1.8 のそれとも合致している。

*Non lapis hanc gemmaeque iuvant quae frigore sola*

*dormiat et nulli sit cupienda viro.*

(Tib. 1.8.39-40)

凍えて一人で眠る者、どんな男にも顧みられないような女には、宝石も珠玉もありがたくはない。

プロペルティウスが裕福な友トゥッルスに説いているのに対し、ティブッルスは女性であるポロエーに語りかけている。したがって、奢侈の空しさと共に独り寝の辛さが強調されているのだろう。そのような独り身の悲惨は、若さを失ったときに、一層辛く感じられることだろう。

### 3.4 「命短き恋せよ乙女」

ここから、「私」はすかさず若き日々が再び戻らぬことに思い至らせようとする。

*Heu sero revocatur amor seroque iuventas,*

*cum vetus infecit cana senecta caput.*

*tum studium formae est: coma tum mutatur, ut annos*

*dissimulet viridi cortice tincta nucis;*

*tollere tum cura est albos a stirpe capillos*

*et faciem dempta pelle referre novam.*

*at tu, dum primi floret tibi temporis aetas,*

*utere: non tardo labitur illa pede.*

(Tib. 1.8.41-48)

白髪の老齢が古き頭を染めるときに、ああ、遅きに失した愛が、青春が思い起こされるもの。そのときこそ、容姿を気遣うことになる。そのときこそ、頭髪は変わる。くるみのみどりの樹皮によって染められて、頭髪は年齢をごまかすことになる。そのときこそ、白髪を根こそぎに抜くことを、皺を取り除いて顔を若返らせることに腐心することになる。だが、あなたは人生の春が盛りを迎えているうちに恋せよ。というのも、それは遅からぬ歩みでもって衰えてしまうから。

全体としては、まさに「命短し恋せよ乙女」とでもいうべき提言である。プロペルティウスは第1巻第19歌において、死後恋人に自分が忘れられてしまうことを恐れ、歌の結びにおいて「だから、可能なうちに、お互いに愛し合い喜び合おう。どんな時も愛の営みは十分に長すぎることはない」(Prop. 1.19.24-25)と恋人に呼びかける。プロペルティウスの「可能なうちに *dum licet*」は、Tib. 1.8.47の「あなたは人生の春が盛りを迎えているうちに *dum primi floret tibi temporis aetas*」に対応するだろう。一方、ティブッルステキストには、提言をほかしてしまうような脱線がわざわざ挿み込まれている。43-46において、若作りの方法(毛染め、白髪抜き、皺取り)をあいだに列挙することで、「老いてからでは遅い。若いあいだに恋を楽しめ」という直截的な言い方はあえて避けられている。「私」はしたり顔で、年齢を欺くための苦肉の策について蘊蓄を傾ける。すでに見た Tib. 1.8.17-26 同様、ここでもじらしの話法が用いられているのだろう。

### 3.5 マラトゥスの嘆き

しかし、この提言の後、乙女への説得工作は、また出発点に戻ってしまった感がある。Tib. 1.8.49-50において、「私」は「だが、マラトゥスを苦しめるな。少年を征して何の栄光があるう。老人に対してこそ、乙女よ、冷酷になるがよい」と戒める。だがこれは、Tib. 1.8.27-30の「君は少年に対して気難しい者とならぬように心がけよ。ウェヌスは、冷たい仕打ちを罰をもって責め立てる。〔少年に〕贈り物を求めてはいけない。贈り物は白髪の恋人から受け取るがよい」という言説の蒸し返しに過ぎない。「私」自身も乙女への説得に手詰まり感を覚えたのか、ついにはポロエーに対するマラトゥスの哀訴を直接話法の形で引用することになる。

'Quid me spernis?' ait. 'poterat custodia vinci:

ipse dedit cupidis fallere posse deus.

nota venus furtiva mihi est, ut lenis agatur

spiritus, ut nec dent oscula rapta sonum;

et possum media quamvis obrepere nocte

et strepitu nullo clam reserare fores.

quid prosunt artes, miserum si spernit amantem

et fugit ex ipso saeva puella toro?

(Tib. 1.8.55-62)

彼は言う、「どうして僕を侮るのですか。門番を出し抜くこともできたでしょう。他ならぬ神が、愛する者たちには欺くことを許しているのです。僕自身恋は忍んで行うものと心得ています。だから、息をひそめますし、接吻を奪っても音はしないのです。そして、たとえ真夜中でも忍び入ることができますし、まったく音を立てずに扉を開けることができます。だが、こんな手練手管が何の役に立ちましょう。冷酷なる乙女が哀れな恋人を侮り、寝台から抜け出すのであれば。

<sup>12</sup>Tib.1.2.15-16: Tu quoque ne timide custodes, Delia, falle;/ audendum est: fortes adiuvat ipsa Venus. (君もまた門番を欺くことを恐れるな。勇気を出して。ウェヌスご自身は勇気ある者を助けるのだから。)

門番を出し抜くことは秘め事の基本であり、ティブッルスの他の歌でも言及されている<sup>12</sup>。クピドーやウェヌスが守護神として、恋する者らを幫助すること、彼らに手練手管を授けることは、すでに考察した Tib. 1.8.35-38 でも言われている通りである。しかし、結局のところそのような恋の裏技も、意中の人に避けられてしまったならば、まったく無意味である。マラトゥスの言葉は、恋愛術は無益であること、ひいては無益な事柄について権威を振りかざす恋愛指南者の愚かしさを露呈している。

言い寄る者に靡かない頑なな者、欺く者、傲慢な者に対して「私」に残されているのは、最早神の怒り、天罰を持ち出すことだけである (Tib. 1.8.67-78)。とはいえ、これ自体も、内容的には *persequitur poenis tristia facta Venus* (Tib. 1.8.28) の繰り返しに過ぎないだろう。マラトゥスもかつては、恋愛者の涙を嘲り、懸想する者の心を弄んで来た。だが、その罰があたったのだ。今や君につれなくされ、こうして涙を流している。傲慢さを捨てない限り、君も同様な目に遭うぞ、そして必ずや自分の行いを後悔するだろうと警告する。

*at te poena manet, ni desinis esse superba.*

*quam cupies votis hunc revocare diem!*

(Tib. 1.8.77-78)

君が傲り高ぶることを止めるのでなければ、君を罰が待っている。君は、祈願をもって、この日をどれ程呼び起こしたいと思うことだろうか！

Tib. 1.8 を締めくくる最終 couplet は、Prop. 1.9 の前篇ともいうべき Prop. 1.7 の最終 couplet を連想させる。

*tu cave nostra tuo contemnas carmina fastu:*

*saepe venit magno faenore tardus Amor.*

(Prop. 1.7.25-26)

君は傲り高ぶって我が詩を蔑ろにするな。しばしば遅き愛は莫大な利息を伴い、やって来る。

ここでは、叙事詩人が恋愛詩を軽蔑していることが窺われる。恋愛詩は、恋の体験と不可分である。したがって、この一節もまた恋する者を侮る尊大な人物への警告になっていると言ってよいだろう。

#### (4) まとめ

以上の比較検討から明らかなように、Tib. 1.8 は Prop. 1.9 と密接な関りを持っている。両者の接点は、とりわけ Tib. 1.8.9 と Prop. 1.9.9 のあいだの語句レベルでの合致 (*quid tibi nunc prodest*) に表れている。すでに述べたように、一方が他方を模倣していると言わざるを得ない程である。(3) で見たように、プロペルティウスが個別の歌で扱っている様々な中心主題は Tib. 1.8 に複数混在している。それは、プロペルティウスがティブッルスの主題の混在を解きほぐして個々の中心主題に分離独立させたというよりも、恐らくその逆、すなわち、ティブッルスがプロペルティウスのさまざまな主題を1つの歌に集合させたと考えの方が自然である。プロペル

ティウス第1巻に含まれる個々の歌は20～40行程度であり、ある特定の主題に即して展開する。これに対して、ティブッルス第1巻の個別の歌は70～100行程度であり、特定の主題というよりは特定の状況に即して展開することが多い。

Tib. 1.8も主題ではなく、状況を描き出すことが主眼である。しかもその描出は、状況をよく知っている者からの秘め事の当事者に対する語りかけによって成り立っている。読者は状況を立ち聞きするような立場に置かれ、詩人から放置されているような感覚を禁じ得ない。状況の全体像を把握するには、「私」のもったいぶった語りから得られる断片的情報を繋ぎ合わせるしかない。さらに *magister amoris* を任ずる「私」は、得意満面に若い恋人たちに恋愛の作法や手練手管を指南するあまり、そこに脱線をも織り込む。自然に働きかけるあやしげな魔術 (3.1)、年齢を誤魔化すための裏技 (3.4) への言及は、本題とは直接関係ないように見えるが、*magister amoris* たる話者の饒舌、気取りをよく表現している。「私」はマラトウスの恋を翻弄するポロエーを諷めようとするが、結局話は堂々巡りや同じ説の繰り返しになってしまう。さらに、マラトウスの言葉は、恋愛にかかわる手練手管、恋愛指南者の教えが無益であることを示す。

Tib. 1.8の描く状況は、若者のあいだで恋の先達を、恋の教祖を自任する者の戯画である。それは、恐らくはティブッルスの自嘲であろう。同時に、Tib. 1.8は Prop. 1.9を中心として、プロペルティウスの様々な主張や言説を織り込んでいる。プロペルティウスの読者には、その既視感に訴える仕掛けになっている。したがって、自分だけでなく *magister amoris* を自任してやまないプロペルティウスをも戯画に巻き込むことになる。

じっさい、プロペルティウスは、Prop. 1.9.11において「恋においては、ミムネルモスの詩の方がホメーロスの詩よりも強い *plus in amore valet Mimnermi versus Homero*」と恋愛詩の優位を誇らしげに語る。1.7.11-14では、「今後、見捨てられた恋人が常に私〔の本〕を読むことになり、我が災難を学び、それが彼の役に立つように (*prosint illi cognita nostra mala*)。私が学才ある乙女に気に入られ、——ポンティクスよ——しばしば不当な脅迫に耐えたと、彼が褒めることになるように (*me laudet*)」と恋愛詩の効用を無邪気に夢想している。しかし、ティブッルスは、そのようなプロペルティウスの強がりや気取りを、実は冷笑しているのではないだろうか。すでに見たように、Tib. 1.1で「私」は「私は褒められることを気にかけない (*Non ego laudari curo*)。我がデーリアよ、私は君と一緒にいる限り、ぐず、役立たずと呼ばれたいものだ (*quaeso segnis iners vocer*)」と言っている。ティブッルスは、自身が役に立たないことに恬然として、恋愛詩の優位も有用性も主張しない。だとすれば、ティブッルスが Tib. 1.8と Prop. 1.9との近接を直截的に示すのに、「今や君に何の役に立つのか *quid tibi nunc ... prodest*」という語句を選んだことは恐らく偶然ではない。